

第45回日本医学教育学会総会および大会

基調テーマ：Quality assurance of medical education —学習成果基盤型教育の導入と展開—

大会長：横須賀 収（千葉大学大学院医学研究院長・医学部長）
実行委員長：田邊 政裕（千葉大学大学院医学研究院医学部医学教育研究室教授）
会場：千葉大学亥鼻キャンパス 千葉大学医学部、薬学部、看護学部
会期：2013年7月26日(金)・7月27日(土)
総会：2013年7月26日(金) 13:10~14:10

018-3 講義時間短縮が学力にあたる影響 The Effects of Cutting Down the Class Time

○森 淳一郎, 清水 郁夫, 多田 剛

(信州大学医学部医学教育学講座)

MORI, JUNICHIROU (The Department of Medical Education, Shinshu University, Matsumoto, Japan)

ECFMGが、2023年からは国際認証を受けた医学部出身者のみに米国の医師国家試験受験資格を与えるとの声明を出したことを受け、日本においても急激に医学教育改革、特に臨床実習改革が進められている。こうした中、本学においても単にECFMGの受験資格にとどまらず、より国際グローバル化に対応した医学教育を目指しており、平成24年度入学生より臨床実習の時間を現行の51週間から72週間に延長し、より参加型の臨床実習を行えるようカリキュラムの調整を行っている。臨床実習の時間を確保するため、本学では講義型授業の時間を従来の1回90分から1回60分に短縮し、全体の授業時間を2/3とすることを決め、平成24年から一部の学年で実施した。今回私たちは、授業時間を短縮したことによる影響を調査したのでここに報告する。【方法】昨年まで90分で授業が行われていた4教科について、今年度60分授業を受けた学生の本試験での成績と、過去2年間に90分で授業を受けた学生の成績を比較した。また、今年度、旧カリキュラムの学生に対し90分授業、新カリキュラムの学生に対し60分授業を行った授業については、今年度の両者の本試験成績も比較した。学年末に自由記載のアンケートを行い、授業に対する感想・意見を求めた。【結果】4教科中3教科において、60分授業を受けた学生の本試験成績が優位に高かった。本年度90分、60分両方の授業を行った科目については、その両者の成績に差は認められなかった。学生アンケートでは60分授業に対する不安や教員の準備不足に対する意見が多く認められた。【考察】単学年の調査ではあるものの、授業時間を短縮したことによる学力の低下は見られなかった。授業時間が短縮したことによる不安から、学生の自学量が増えたことによる可能性があると考えている。一方で、教員は単に90分用に用意した授業を60分で行うのではなく、60分用の授業プランを立てることが求められている。

025-6 教育協力病院に対する短時間医学教育FDの有効性 The Effects of Short Faculty Development for Educational Hospitals

○森 淳一郎, 清水 郁夫, 多田 剛

(信州大学医学部医学教育学講座)

MORI, JUNICHIROU (Department of Medical Education, Shinshu University, Matsumoto, Japan)

ECFMGが、2023年からは国際認証を受けた医学部出身者のみに米国の医師国家試験受験資格を与えるとの声明を出したことを受け、日本においても急激に医学教育改革、特に臨床実習改革が進められている。こうした中、本学においても単にECFMGの受験資格にとどまらず、より国際グローバル化に対応した医学教育を目指しており、平成24年度入学生より臨床実習の時間を現行の51週間から72週間に延長し、より参加型の臨床実習を行えるようカリキュラムの調整を行っている。実習をより実践的に進める上で、大学病院における実習は、高度先進医療を担っている病院であることから症例に偏りを生じやすく、またリソース的にも困難が伴うことから、長野県内全域に位置する教育協力病院との連携で実習を行う必要がある。そのためにも、教育協力病院において学生を指導する立場にある医師の指導力を担保することが重要な課題となっている。一方で、教育協力病院に勤める多くの教員は、多忙、地理的条件等から泊まり込みのFDに参加するのは困難である。今回私たちは、1回30分の短時間医学教育FDを教育協力病院に出張して行い、成果を上げたのでここに報告する。【方法】長野県内にある5つの教育協力病院に出張し、1回30分の短時間医学教育FDを合計89名の医師に対し行った。教育成果は、FD前後のアンケートを比較することで確認した。【結果】5病院全てで、FD後にアンケート正答率が上昇した。全体では、プレアンケートの正答率40%であったのに対し、ポストアンケートの正答率は68%であった。また、FDの長さについて、全体の83.8%が適切であると回答した。【考察】教育協力病院に出張して医学教育FDを行うことにより、より多くの医師に対してFDを行うことができた。また、短時間ではあったものの、アンケートの結果からは一定の成果を上げていると考えられる。平日に勤務医でもある教育協力病院の教員に医学教育FDを行うのであれば、30分程度のFDを繰り返し行うのも有効な方法だと思われる。